

2023年10月8日

「光を仰ぎ見て」

創世記 4:1-10

マルコによる福音書 7:14-23

竹島 敏牧師

人類初の殺人といわれる、カインとアベルの記述は、自分にとって喜ばしくないことをすべて他者のせいにしようとする人間の心の罪の問題と同時に、自分の罪を正視することのむずかしさが描かれているともいえるでしょう。また、マルコ福音書には、自分の中から出てきたもので人は汚される、とあります。だれの心の中にも罪の想いが潜んでいる、そういうものです。そして他者の罪を正視するとき、自分の中にも同じような罪が潜んでいることに気づいてしまう…。だから人の罪に対しても、まともに向き合えないものなのかもしれません。

カインは神からの叱責によりやく罪を認めますが、弟を殺したことへの痛みも深い反省の言葉もありません。追放される自分の身にふりかかるであろうことのみを、神に訴えています。それでも神は愛と深い憐れみをもって、カインに命の保証を与えられました。カインはこの後、どのように歩んだでしょう。実に人間は、他者から深く愛されることによってこそ、自分の罪を見つめ、心から悔い改めて正しく生き始めることができるのではないのでしょうか。

今は天にある信仰の先達も、この地上を歩む私たちも、その誰もが自らの命の奥深くに、秘かに罪を抱えていた、また、抱えていることを想います。しかし、罪を抱えながら歩む私たちの命に差し込んでくる、キリストの愛の光がある。そのキリストの十字架の愛の光を仰ぎ見ながら歩む。それがキリスト者である私たちの人生なのではないのでしょうか。罪深い私たちとどこまでも歩んでくださる、十字架の主イエスを仰ぎ続けた先達に見守られながら、私たちもまた、自分の罪からも他者の罪からも目を背けずに、この地上の人生を歩んでまいりたいと思います。